

書陵部藏医心方・成實堂文庫藏医心方における付訓の基盤

——和名類聚抄・本草和名との比較を通して——

松本光隆

はじめに

- 一、兩系統の訓共に和名類聚抄に認められるもの
  - 二、朱筆訓（丹波重基の訓点）のみが和名類聚抄に認められるもの
  - 三、墨筆訓（藤原行盛の訓点）のみが和名類聚抄に認められるもの
  - 四、「俗云」等注記に関するもの
  - 五、医心方の漢字と和訓との対応が和名類聚抄に認められないもの
- まとめ

はじめに

本稿は、書陵部藏医心方・成實堂文庫藏医心方を資料として、漢字と和訓との対応関係に注目して考察を進めたものである。

書陵部藏医心方二十五卷（巻第四・廿二・廿五・

廿八・廿九を除く）と、成實堂文庫藏医心方巻第廿二には、二系統の訓点が付されている。一つは、藤原日野家の人物である藤原行盛の訓点と、今一つ

は、丹波家の人物である丹波重基の訓点とである。この二系統の訓点は、使用された筆の色（藤原行盛の墨筆の仮名点に対して、丹波重基は朱筆の仮名点を表記するということ）や、ヲコト点・仮名点に対して付された合点などにより識別できる。この二系統の訓点の訓読法の異同として現われる種々の事象のうちで、実詞の訓の異同に注目し、その訓の付された背景について、和名類聚抄・本草和名との比較を中心に考察を進める。

本稿においては、比較の対象として和名類聚抄・本草和名を選んだため、右の実詞の訓の異同のうち、和名類聚抄・本草和名に記載のあるものと考えられる名辞類を取り上げる。つまり、右の二系統の訓点の訓読法が相違する実詞の訓の用例のうち、和名類聚抄・本草和名にその事項が存在する可能性のある名辞類の訓をもつ用例を抜き出し、それと和名類聚抄・本草和名とを比較することとする。

さて、この操作により抽出された書陵部蔵医心方二十五巻と成實堂文庫蔵医心方巻第廿二との用例について、和名類聚抄・本草和名との比較を試みる。比較に用いた和名類聚抄は、元和版和名類聚抄であるが、必要に応じては箋注本和名類聚抄をも引用し

た。本草和名は、寛政版本草和名を用いた。  
一、両系統の訓共に和名類聚抄に認められるもの  
書陵部蔵医心方二十五巻と成實堂文庫蔵医心方巻第廿二（以下単に医心方と称する）に見える二系統の訓共に、和名類聚抄に認められるものは、左の如くである。

1	2	3	4	5	6
麻黄	亭歴	蜀椒	當歸	當歸	連翹
カネチサ	タマシカ	シバシカミ	ヤマセリ	オホセリ	イタキクサ
シバシカミ マアサ	カラタハセリ	オホシカミ オホシカミ	ウマセリ	ウマセリ	イタチハセ
巻一	巻五	巻十六	巻六	巻六	巻八
麻黄	亭歴子	蜀椒	當歸	當歸	連翹
本草云麻黄 <small>和名加豆蒲久 任一云阿萬茶</small>	本草云亭歴子 <small>和名加豆 本加茶一 云阿之卷豆茶 云阿之卷豆茶</small>	蘇敬本草注云蜀椒 <small>音讀 和名</small>	本草云當歸 <small>和名夜半里一云 於羅世里又云半里</small>	本草云當歸 <small>和名夜半里一云 於羅世里又云半里</small>	本草云連翹一名三麻
(ニ〇、セ、ウ)	(ニ〇、セ、ウ)	生蜀郡故以 名之(十六、二十二、ウ)	(ニ〇、セ、ウ)	蛭 一名蛭	蛭 一名蛭

7	防風	ハマスカナ	卷十三	防風	草 <small>和名以多知久佐</small> 一云以本知波勢 <small>(二〇、ハ、オ)</small> 兼名苑云防風一名屏風 <small>和名振源和茶</small> 一云振源和茶 <small>(二〇、六、オ)</small>
8	恒山	茎クサキ ウツヒス イヒホ	卷十六	蜀漆	新抄本草云蜀漆 <small>和名久佐</small> 木乃稱恒山苗也恒山 <small>和名</small> 比類乃以比稱一 <small>和名久佐</small> 云又佐木乃稱 <small>(二〇、三〇、オ)</small>
9	甘皮	ヌナクカハ カカハ	卷廿二	橘皮	本草注云橘皮一名甘皮 <small>和名本知波茶乃</small> 加波一云不加波 <small>(十六、二十三、ウ)</small>
10	辛夷	ヨシハシカミ ギアラキ ヨシハシカミ 和名紫木名 ミヤ	卷廿	辛夷	本草云橘皮一名甘皮 <small>和名不加波其</small> 色葉之義也 <small>(十七、十一、ウ)</small> 崔禹錫食經云辛夷 <small>和名</small> 四良木一云古 <small>和名</small> 下之派之加美其子可嗽之 <small>(十六、二十二、ウ)</small>
11	疣目	イヒホ イヒホ	卷廿	疣目	病源論云疣目 <small>今案即疣字</small> 又以手足邊忽生如豆粒 <small>和名以比保</small>
12	痕	アトメキス キハ	卷十四	瘡	強於肉也 <small>(三、二十六、オ)</small> 唐韻云瘡 <small>音倉和</small> 瘡也瘡也瘡也瘡也 <small>和名</small> 瘡也瘡也瘡也瘡也 <small>和名</small> 四聲字苑云瘡 <small>和名</small> 瘡處也廣雅云痂 <small>和名</small> 上平也 <small>(三、二十四、ウ)</small>

以上の十二項目が筆づられる。1の例でいえば、「麻

黄」に對する朱筆訓「カツネクサ」と墨筆訓「アマナ」が共に和名類聚抄に登載されてゐる。以下12まで同様である。但し、この中で、1の墨筆訓「クレノハシカミ」は和名類聚抄には「生薑」「薑」の和名として登載されており、「麻黄」の和名としての登載はない。2の墨筆訓「カハラナ」は和名類聚抄に和語そのものが見えない。7の墨筆訓「スカナ」・12の朱筆訓「アト」も同様に和名類聚抄には見当らない。

右に掲げたもののうち、1より10までの十項目が本草類に属するが、これと本草和名とを比較すると、朱筆訓・墨筆訓共に本草和名に認められるものは、1・2・5・6・7・8である。但し、2の墨筆訓「カハラナ」・7の墨筆訓「スカナ」は本草和名には見えない。又、1の墨筆訓「クレノハシカミ」は当該字の和名としては見えず、和名類聚抄におけると同様である。3は朱筆訓のみが、10は墨筆訓のみが本草和名に確認される。4については、「ウマセリ」・「ヤマセリ」が本草和名に認められるが、後二例の朱筆訓「オホセリ」は本草和名に見えない。しかし、本草和名の抄出である書陵部藏医心方巻第一の諸薬和名には、

○當歸 和名守末世利 一名也末世利 又於保世利 一名加波佐久

とあり「オホセリ」の訓が確認される。今は本草和名に登載がない。

さて、この二系統の訓共に和名類聚抄に認められるものとして掲げた用例について、和名類聚抄における掲出順を見ると、朱筆訓が第一位に掲げられ、墨筆訓が第二位以下の登載の和名と一致するものは、1・2・6・7・8・9・11で、4は墨筆訓が第三位に登載された和名に一致するのに対して、朱筆訓は、第一位・第二位の和訓と一致する。逆に墨筆訓が第一位に登載された和名と一致し、朱筆訓が第二位の和名と一致するのは、3・5・10の三項のみである。12については和名の登載された形態が右と異なるから、これを保留するとしても、朱筆訓は和名類聚抄に登載された掲出上位の和名と一致するが、墨筆訓の場合は、それ以下の掲出の和訓と一致する傾向が強い。

二、朱筆訓（丹波重基の訓点）のみが和名類聚抄に認められるもの

医心方の二系統の訓のうち、朱筆訓のみが和名類聚抄に認められ、墨筆訓については、医心方本文に

表記された漢字との関係において和名類聚抄に確認されないものは、以下の通りである。

19	18	17	16	15	14	13
楮子	豉	麵	通草	天鼠矢	飛廉	黄連
カチハノミ	シキ	ムキコ	アヒカラ	カハホリ	ソノキ	カクマサ
カシハノミ	シサ	カメツナ	アヒカラ	カスネ	シホテ	アマナ
巻五	巻三	巻三 巻十五 巻十五	巻三	巻一	巻一	巻一
穀	豉	麵	通草	蝙蝠	飛廉草	黄連
玉篇云楮部古 穀木也唐韻 云穀名知和 木名也(二〇、七、ウ)	釋名云豉是菘和五味調和者也(十六、二十二、オ)	釋名云麵其謂反麥之粒和名無麥(三、オ) 米麥細屑也(十六、一〇、オ)	景注云莖有細孔兩頭相通(和名同介 比和部良(二〇、二、オ))	敬曰天鼠矢(鼠矢(十九、八、オ)) 翼(和名加 波保皇 方言云蠟燭(二音蘇)	本草云飛廉草(和名智 不三希 保之夫 久佐)	本草云黃連一名玉連(和名加久 木久佐 (二〇、四、ウ))



37	36	35	34	33	32	31
麴	人參	鹿茸	黃耆	茵芋	釜月底星	細辛
カハツチ	カニケクサ	カワカヅ	ヤハシクサ	ニツクシ	カクシクサ	ミラネクサ
モヤシ	カニケクサ 「ヌクシ」	カノツノ	カハツクサ 「ヤラシクサ」 「ヤラシクサ」	ツクシ	カクシクサ 「ミラネクサ」	ミラネクサ
卷十五	卷十三	卷十三	卷十三	卷十三	卷十三	卷十
麴	人參	鹿茸	黃耆	茵芋	釜	細辛
使生衣朽敗也(十六、十五ウ)	和名加乃介ス 伍一五又末乃伊(二〇、五ウ)	雜要決云鹿茸 <small>和名鹿乃鹿</small> 角初生也(參、參七、十三オ)	本草云黃耆 <small>和名夜夜</small> (二〇、ヒ、ウ)	本草云茵芋 <small>和名和名仁豆</small> 之(二〇、二十六ウ)	古史考云釜 <small>和名釜</small> 黃帝造也(十六、一ウ)	釋藥性云細辛一名小 辛 <small>和名參良乃補久佐</small> 云比木乃比久佐(二〇、四ウ)

滑海藻 本朝令云滑海藻和名女俗

末滑海藻和名女俗

(十七、十七ウ)

釋藥性云細辛一名小

辛和名參良乃補久佐

云比木乃比久佐(二〇、四ウ)

古史考云釜和名釜

黃帝造也(十六、一ウ)

四聲字苑云龜別名龜

變處也文字集略云和名

龜後穿也(十二、十四オ)

本草云茵芋和名和名仁豆

之(二〇、二十六ウ)

本草云黃耆和名夜夜

(二〇、ヒ、ウ)

雜要決云鹿茸和名鹿乃鹿

角初生也(參、參七、十三オ)

和名加乃介ス

伍一五又末乃伊(二〇、五ウ)

釋名云麴和名

加無本和朽也和名

使生衣朽敗也(十六、十五ウ)

42	41	40	39	38
櫻桃	蚯蚓	由跋	草麻子	夕藥
ハカミミカ	ミナス	カキツハナ	カカシクミ	エヒススリ
カハツラ	カハラミス	カキツハタ	ミヤギヨクミ	「エヒススリ」
卷十八	卷十六	卷十六	卷十六	卷十六
朱櫻	蚯蚓	由跋	草麻	夕藥
本草云櫻桃一名朱櫻	或謂鳴初(十九、二十三ウ)	蘇敬本草注云劇草一名馬蘭 <small>和名加木</small> 唐韻云蛻 <small>和名</small> 也	本草云草麻 <small>和名</small> 之名(二〇、八オ)	唐韻云夕藥 <small>和名</small> 藥草可和食也

48	47	46	45	44	43	
地榆	地榆白皮	麋	菜螺蛸	芎藭	芥子	朱櫻
エヒスネ	ヤニノカハ	オホシカ	オホシカ	オホシカ	カシノミ	本草云櫻桃一名朱櫻
エヒスネ	ニレノカハ	クシカ	オホシカ	オホシカ	ナタネ	和名櫻加云(二〇、二四、才)
卷廿二	卷廿二	卷廿二	卷廿二	卷廿二	卷十九	通名保久良(卷十九、九、ウ)
地榆	榆	麋	燈蛾	芎藭	芥	本草云芥(卷十九、九、ウ)
陶隱居本草注云地榆	爾雅注云榆之皮白名粉	四聲字苑云麋鹿而大毛不斑以冬至解	燈蛾一名	唐韻云芎藭	者也(十六、二十三、才)	唐韻云芥(卷十九、九、ウ)

53	52	51	50	49		
鼈	續斷	守宮	弩弦	葵	地榆	地榆
カハカメ	オニノカラ	トカケ	オホシカ	アヒ	エヒスネ	エヒスネ
カメ	ウチシカ	トカケ	オホシカ	アウウ	エヒスネ	エヒスネ
卷廿六	卷廿四	卷廿二	卷廿二	卷廿二	卷廿二	卷廿二
鼈	續斷	蠅	弩	葵	葵	葵
大載禮云甲虫三百六十	拾遺本草云續斷	蠅一名	說文云弦	本草云葵	葵一名	葵一名

59	58	57	56	55	54
麻黄	半夏	山葵	椽子 椽實	穢麥	母雉鷄冠
カクキクサ	ホソソミ	ワサヒ	ソルハミ	カクスキ	三六トリスカ
カクシクサ	ホソヒ	イニレ	イキヒ	カチカタ	トサカ
卷廿三	卷廿	卷廿	卷廿	卷廿	卷廿六
黄連	麻黄	山葵	椽子	穢麥	冠
本草云黄連一名王連	本草云麻黄 佐云兩漢系 (二〇、七、ウ)	養生秘要云山葵 用出蓋二字今補益食也 美所尔未詳 (十六、二十三、オ)	崔禹錫食經云椽子 名以此相似而大於椽子者也 (十七、ハ、ウ)	蘇敬本草注云大麥一名青科麥 一名加知加木 (十七、四、オ)	名范云龜一名龜 音放漢錦抄云字美加米 (一九、一〇、ウ)

64	63	62	61	60
腎	涕	額	脚踏	穀
ムラト	ナムタ	ヒタヒ	アヒラ	カヒ
ムネ	ハナシル	ヌカ	アウラ	カヒ
卷廿七	卷廿一	卷二	卷一	卷世
腎	涕	額	脚踏	穀
白鹿通云腎名無良止水之精也色黑 (三、十二、オ)	漢說文云涕淚 附說文云涕淚 謂之承江 美本々利 (三、四、オ)	楊雄方言云額 謂之額 幽州謂之額 (三、二、ウ)	說文云脚踏 音足字亦作跡 和名厚不字是下也 (三、十五、オ)	尙書注云貝 唐韻云穀 也(下略) (十九、十六、オ)

66	65		
瘡肉	瘡	カサ	
アマンシ、	アト		
卷五	卷二		
瘡肉	瘡	唐韻云瘡 <small>音倉和名加任</small> 病也 <small>(下略)</small>	胃臑 唐韻云胃 <small>音胃反臑於臑臑臑臑</small> 臑也 <small>(三ノ八ノオ)</small>
肉也 <small>(三ノ二十六ウ)</small>	説文云瘡 <small>音倉和名加任</small> 病也 <small>(下略)</small>		

以上が挙げられる。13についていえば、朱筆訓の「カマクサ」が和名類聚抄に見られるが、墨筆訓の「アマナ」は、当該「黄連」の和名としては和名類聚抄には見られない。このようにいずれも朱筆訓と医心方本文の漢字との対応が、和名類聚抄に見える漢字と和語との対応に一致するものである。和名類聚抄に従う限りにおいては、13の墨筆訓「アマナ」は、「黄連」の訓としてよりむしろ「麻黄」の訓としての方が適當のようである。同様に、和名類聚抄に照し合せて見る限りにおいては、17・19・28・30・32・40・41・46・50・53・55・56・57・58・60・61・64の墨筆訓は、医心方本文の該當する漢字とは別の漢字との対応を想定する方が適當のようである。しかし、石のことは、飽くまで和名類聚抄に見る限りにおいて言い得ることで、例えば、46の「糜」について、和名類聚抄に照し合せれば、「糜」に對する「オ

ホシカシ、「糜」に對する「マシカシ」の対応は、朱筆訓の対応に一致するが、新撰字鏡には、  
 ○糜 讀聲反閉入自加又於保加 (喜和奉 六十六ウ)  
 とあり、必ずしも和名類聚抄の対応とは一致しない。又、38の「夕藥」に對する墨筆訓「エロスクサ」と、新撰字鏡に、  
 ○夕藥 二八片格臑于衣核根 (天治本卷七、三十六オ)  
 として、「夕藥」の訓として見えているし、53の「鼈」に對する墨筆訓「カメ」は、觀智院本類聚名義抄に、  
 ○鼈 并切通體字 カメ (僧下ヨ)  
 とあり、「鼈」の訓として見えている。同様に56の「椶實」について、觀智院本類聚名義抄に、  
 ○椶實 イチト (佛下本96)  
 とあって墨筆訓との対応を認めることができ。このような例から、先に掲げた用例について医心方に於ける墨筆訓が誤用であるとは言えないと理解されるのであるが、少なくとも和名類聚抄に認められる漢字と和訓との対応関係とは一致しない。  
 14の朱筆訓「ソ、キ」は、和名類聚抄に認められるが、墨筆訓「シホテ」は「飛廉」の和訓としては確認できない。但し、和名類聚抄には、  
 ○鞞 考聲切韻云鞞音堅名之保天穿鞞橋皮也(十五、二オ)



の語が本草和名に登載されず、「蛭蚓」の登載はなく、「白頭蚯蚓」に「ミミズ」の和名がある。 等は、「丹雄鶏」に「ニハトリ」の和名を付して登載されているが、「サカレ」、「トサカレ」、「冠」の登載はない。

三、墨筆訓（藤原行盛の訓点）のみが和名類聚抄に認められるもの

前節とは逆に、医心方のニ系統の訓のうち墨筆訓のみが和名類聚抄における和訓と漢字との対応に一致するものは左の如くである。

67	吳茱萸	カハシカミ	卷五	吳茱萸	本草云吳茱萸 <small>和名加茂</small>
68	釜月下土	カシシツチ	卷七	釜	古史考云釜 <small>和名釜</small> 釜造也 <small>（十六、一ウ）</small>
69	淡竹	クレタケ	卷九	淡竹	唐韻云淡竹 <small>徒敢反上竹之重陽</small> 淡竹作淡吹

竹名也  
文字集略云竹音竹 竹名也  
（二〇、二〇、ウ）

70	蔓菁	ナタネ	卷十	蔓菁	蘇敬本草注云蔓菁 <small>蔓菁</small> 北人名之蔓菁 <small>上音蔓和陽</small>
71	穀	カモ	卷十	穀	說文云穀 <small>乃百之略俗云節</small> 輻所湊也 <small>（十一、セ、ウ）</small>
72	茈胡	ハマアカナ	卷十	茈胡	本草云茈胡 <small>和名茈胡</small> 敬注云茈古紫字也
73	烏芋根	クワキネ	卷十二	烏芋	蘇敬本草注云烏芋 <small>和名</small> 生水中澤厲之類也 <small>（十七、十五、オ）</small>
74	栢子人	カヘノミ	卷十三	栢	兼名苑云栢一名栢 <small>和名栢</small> （十七、十五、オ）
75	大棗	オホナツメ	卷十三	大棗	爾雅云檉栢業松身 <small>音蔓入</small> 本草云大棗一名美棗 <small>音亦</small> 蘇敬注云酸棗一名 <small>音亦</small> 入棗之中味

76	海蛤	ハマクリ 之キカヒ	卷十六	海蛤	酸者也(十七、一〇、才)
77	荏菜	オホ工 工	卷十七	荏菜	野王菜云葉大而青毛其 實白者曰荏 <small>和名反</small> 野王菜 云葉細而青其實黑者曰 蘇 <small>新抄云荏和名乃 蘇長一云荏和名</small> 此二物雖一 類其狀不同耳(十七、六ウ)
78	蝦蟇	和名比支 ヒキ	カヘル 卷十六	蝦蟇	唐韻云蛙 <small>鳥蟪反古本作 蛙和名加那流</small> 蝦蟇 也兼名苑云蝦蟇 <small>音一 三音</small>
79	桐	カシノノ 卷廿一	桐	蟾蜍	兼名苑注云蟾蜍 <small>音 一音余和 名比木</small> 似蝦蟇而大陸居 者也(十九、二十四、ウ)
	桐樹	カシノノ 卷廿一	桐	蟾蜍	兼名苑注云蟾蜍 <small>音 一音余和 名比木</small> 似蝦蟇而大陸居 者也(十九、二十四、ウ)
	桐樹	カシノノ 卷廿一	桐	蟾蜍	兼名苑注云蟾蜍 <small>音 一音余和 名比木</small> 似蝦蟇而大陸居 者也(十九、二十四、ウ)

80	狼牙	ウツナキ コツナキ ホカシナ	卷廿	狼牙	紀私記云歷(三〇、三十一、才) 陶隱居本草注云狼牙 一名天牙 <small>音古不 堅木</small> 根牙似 獸牙齒故以名之 (二〇、十五、才)
81	牛旁	和名吉取守 ウツナキ	卷廿二	牛旁	本草云慈實一名牛旁 <small>音即反和名吉取一云守 本不令不令字略作屋形也(十七、十四、才)</small>
82	鼠壤	ウツナキ ホカシナ	卷廿三	鼠	四聲字苑云鼠 <small>音鼠反和 音讀類美穴居</small> 小獸種類名者也(十八、二〇、才)
83	小腸	コワタ	卷九	小腸	本草云 <small>音鼠反和名守 作龜和名字音鼠</small> 通俗文 云糞鼠一名 <small>音鼠</small> 兼名 苑注云恒在中行若 見三光即死(十八、二十一、才)
84	大腸	オホワタ	卷九	大腸	中黃子云大腸 <small>長反和名 音鼠</small> 為 傳送之府(三、十二、才)
85	胃	オホワタ ハラワタ	卷十八	胃	中黃子云胃 <small>音鼠反和名 音鼠</small> 為五 穀之府(三、十二、才)
	胃	オホワタ ハラワタ	卷十八	胃	中黃子云胃 <small>音鼠反和名 音鼠</small> 為五 穀之府(三、十二、才)
	胃	オホワタ ハラワタ	卷十八	胃	中黃子云胃 <small>音鼠反和名 音鼠</small> 為五 穀之府(三、十二、才)

鳥受食處也(十八、十四、ウ)

86	87	88	87
頭	膚	脱肛	皺鼻
ハニ	マケ	テイルル テイルルキ	アカハナ ニキミハナ
カシラ	ハタヘ	答七	答世
巻五 巻七	巻五	巻七	巻世
首頭	膚	脱疰	皺鼻
釋名曰首 <small>首は頭也</small> 始也頭 <small>始也</small>	陸詞云膚 <small>膚は皮膚也</small> 體肌也 <small>體は肉也</small>	病源論云脱疰 <small>疰は疰也</small> 肚門脱出也久疰 <small>疰は疰也</small>	野王案 <small>野王案</small> 皺鼻 <small>皺は皺也</small> 鼻上 <small>鼻は鼻也</small>
獨也言體體而 <small>一云體之良</small>	獨貴也(三ノウ)	則大腸虛冷所爲也	皃也(三ノウ)
	(三ノウ)	(三ノウ)	(三ノウ)

右に挙げた用例は、67の例でいえば、墨筆訓「カハラシカミ」が和名類聚抄に見られるが、朱筆訓「カラハシカミ」の方は和名類聚抄には見られない。このように、和名類聚抄と比較する限りにおいては、墨筆訓と医心方本文の漢字との対応を認めることができるものである。このうち、83・84・85の医心方巻第九の朱筆訓は、墨筆訓に対する並立訓である。又、83の「小腸」↓「コワタ」、84の「大腸」↓「オホワタ」と後掲44の「腸」↓「ハラワタ」との間に、漢字と和訓との対応関係において、付訓の方法に使い分けの態度を認めることができる。

88の「脱肛」については、医心方に「治脱肛」治脱肛とあり、方第九(巻七)

とあり、墨筆訓は名詞に訓じ、朱筆訓は「ヤマヒ」を付加せず、動詞連体形に訓じたものである。厳密な意味では、和名類聚抄の漢字と和語との対応は、墨筆訓の方に一致するが、朱筆訓においても、基本的には和名類聚抄における漢字と和訓の対応関係から逸脱する例とは考えられない。

87の「膚」は、医心方に「眼中」眼中、卒立「膚」覆「童子」(下略) (巻五30)

とあり、文脈より眼病を意味するものであると考えられる。和名類聚抄に登載された「ハタヘ」の和名を持つ「膚」は、形體部肌肉類に属づけられたものであることに注目せねばならない。又、86の「頭」は医心方には

○鯉魚、竹筒、盛塞、頭 (下略) (巻五37)

とあり、両例共に、先端の意に該当するものである。和名類聚抄に登載された「カシラ」の和名を持つ「頭」は、形體部頭面類に掲げられたものであり、身体部位を指すものである。医心方の用例は身体部位を指すものではなく、先端の意を持つものである。「カ

シラレの語が、身体部位のアタマを意味する語から、抽象的に端の意にも使用された例が平安中期以後に有ることは既に先学の指摘されたところである。<sup>注</sup>「ハタヘ」が、身体部位を意味する語から、眼病を指す語として使用されたか否かについては、今少し用例を搜索して見る必要が有ろうが、「カシラ」も「ハタヘ」も、本来は身体部位を指す語であつたろうことは推測するに難くない。右の二項については、墨筆訓が即字的であると言えようであるが、和語としての用法からは、朱筆訓に比べて新しいものであると言えようである。

右に掲げた用例では、67より82までが本草類に属する語であるが、これと本草和名とを比較すると、68・71は本草和名に記載がない。本草和名において朱筆訓・墨筆訓共に医心方本文の漢字との対応が認められるのは74の一項目、墨筆訓の方の対応が認められるのは、70・76・81・82の四項目で、逆に朱筆訓との対応が確認されるのは、残り67・69・72・73・75・77・78・79・80の九項目を見出す。和名類聚抄との比較を通じては、墨筆訓との対応を認められるものについても、特に本草類に関して、本草和名と比較してみると、朱筆訓の方の対応を確認するこ

とができる。

四、「俗云」等注記に関するもの

和名類聚抄には、「和名」を冠して和語を掲げる他に、「俗云」又は「此間云」などを冠して和語を掲げる場合がある。この「俗云」等の冠称のある登載語と一致する例が十一例ある。これは、次の通りである。

90	踵	クヒス	巻六	踵	唐韻云 跟 <small>根反</small> 比 <small>名</small> 足踵也 踵 <small>音</small> 足後也 (三十四ウ)
91	石留黄	ユノアウ	巻七	流黄	本草疏云 石流黄 漿 <small>石</small> 液也 和名由乃阿 <small>和俗云由玉</small> (一十七オ)
92	枸杞子	ヌニスネ	巻十三	枸杞	本草云 枸杞 <small>音起</small> 根下潤 昔泉其精靈多為犬子 或為小兒 <small>和俗云古</small> 抱 <small>音</small> 林子云一名托 <small>音</small> 櫛一名却 <small>音</small> 老 <small>音</small> 托 <small>音</small> 櫛 (三十四オ)
93	癩	ワラハヤミ	巻十三	癩病	説文云 癩 <small>音</small> 俗云衣 <small>音</small> 衣 <small>音</small> 寒 熱並作二日一發之病 也 (三十四オ)
94	癬瘡	千加佐 セニカサ	巻十七	癬	説文云 癬 <small>音</small> 俗云 <small>音</small> 乾瘡也 録 <small>音</small> 加 <small>音</small> 佐 <small>音</small> (三十六オ)





訓の語は和名類聚抄に登載がない。

以上より、和名類聚抄に、「和名」を冠した語と、「俗云」等の冠称のある語とが共に登載されている場合、朱筆訓（丹波重基の訓点）は前者に、墨筆訓（藤原行盛の訓点）は後者に一致する。和名類聚抄に「俗云」と冠した語のみが掲載されている場合には、朱筆訓（丹波重基の訓点）がこれと一致するという傾向を把握できる。

ここに掲げられたもののうち本草類に属する語は 91・92・99 の三項目であるが、これと本草和名とを比較すると、いずれも朱筆訓と医心方本文の漢字との対応が確認される。

五、医心方の漢字と和訓との対応が和名類聚抄に認められないもの

医心方本文の漢字のみが和名類聚抄に登載されて、朱筆訓・墨筆訓共に和名類聚抄に登載のないもの、又、朱筆訓・或は墨筆訓は和名類聚抄に登載されていても医心方本文の漢字の登載がないもの、又、漢字・和訓共に和名類聚抄に登載がないもの、又、漢字・和訓共に和名類聚抄に登載があつても、両者の対応関係が確認できないものを一括して以下に掲げ

る。

106	107	104	103	102	101
糠 粟米	吳菜莢	卑解	瓜 丁 帶	鐵精	藁本
ミヌ米	カネカミ	オニトコロ	ニカウホソ ミダリホソ	カネサヒ	サハソラシ
アノシネ	ムネカミ	オホトコロ	ウリケネ	カナソソ	カサモチ
卷八	卷八	卷八	卷五	卷廿三	卷七
梁米	吳菜莢			鉄精	藁本
崔禹錫食經云梁米一名芭粟一名稽米 <small>梁音望音 白字留之彌</small>	本草云吳菜莢 <small>味更苦 和名加奴</small>			陶隱居曰鉄精一名鉄漿 <small>和名加補 乃佐比</small> 鍛竈中如塵者也（十七、十七、才）	蘇敬本草注云藁本 <small>和名 波留根之一 五留根之一</small> 根上苗下似藁 故以名之 （二〇、十三、ウ）
米（十七、五、才）			鉄落 本草云鉄落一名鉄液 <small>和名鐵乃波大 三加奈合會</small> 蘇敬曰是鍛家燒鉄赤沸砧上鍛之皮甲落也（十七、十六、ウ）		

118	117	116		115	114	113	112		111	110	109	108	107
蠟螭	王瓜	蠟螭		磁	黍藁	菜上奇	露蜂房		灶屬	鬼臼	鷄蘇	貝齒	澤寫
ワソリ	ヒサク	ヒルノミヤ シロミヤ		ス	キミカラ	クハノホヤ	オホケノス		ヲカキカヒ	又ハノミ	子ヒサキエ	ハノミ	オモダカ
サトリ	ホソヒ	シロミヤ		ヒシホ	アウツラ	クハノホヤ	ハチスノス		ヲカキ	ハノミ	イヒサエ	ハノクリ	クハ中
卷一	卷卅	卷廿六		卷廿二	卷廿二	卷廿二	卷廿一		卷十八	卷十六	卷十二	卷十二	卷九
蠟螭			醬	酢									澤寫
兩雅注云蠟螭悅翁二音和 以蜂而細青者也兼右			四聲字苑云醬 <small>即亮反和名比豆之醬對青醬</small> 醢也(十六、二十一、ウ)	本草云酢酒味酸溫無毒 和名煖酸音基官反 <small>陶隱居曰俗呼為苦酒</small> 多系部詩經為加 長任介此類也 (十六、二十一、ウ)									本草云澤寫一名苦芋 和名茶 毒(十七、十五、オ)

	123		122		121	120	119
	菘		干薑		青蒿	浪宕子	烏鷄
	カフシ		クハシカミ		オハキ	オホルサ	ニハトリ
	シカナ		オホシカミ		ウマセリ	オホクサ	アヲトリ
	卷一		卷廿三		卷十八	卷五	卷五
辛菜	辛芥		薑		青蒿	荳蔻子	烏鷄
和名荳蔻之 俗用芥子	荳蔻 崔禹錫食經云又有辛菜 芥多加菜(十七、二十一、オ)		兼名菘云薑 <small>居反和名</small> 又禮乃取 之加菜 (十七、二十二、オ)		七卷食經云青蒿一名 荳蔻名於八不查禹錫食經 云狀似艾草而香作羹 食之(十七、二十四、ウ)	本草云荳蔻子 <small>狼唐之音和名於保</small> 美留(二〇、十五、オ)	苑云一名蠟藏 <small>果類</small> (十九、六、オ)

133	132	131	130	129	128	127	126	125	124
苦瓠穰	茄苗	梁米	牡蠣	茱萸	茱萸	膏	苧白	支子	伏龍肝
ナシロコサ	ナスヒ	キヒモチ	ヲカキヒラ	カラハシカミ	カラハシカミ	ナツメ	キノシロミ	クチナシ	カシノミ
ナシヒナハ	ナスヒナハ	アヲヒヨネ	ヲカキノヒ	カハシカミ	イタカカミ	ナツメヒラ	キノイネ	クチナシサネ	カマツチ
卷九	卷八	卷八	卷七	卷廿	卷十七	卷五	卷五	卷五	卷五

好通口鼻之氣  
(十七、二十一、ツ)

梁米  
崔禹錫食經云梁米一名芭粟一名禮米梁米芭粟會知名爾雅乃字之稱白梁米一名圓米(十七、五、オ)

143	142	141	140	139	138	137	136	135	134
躑躅	小豆生蜜	蜘蛛網	竹茹	檉	亂髮	酸草	猪肉	龜安墨	竹瀝汁
コムラ	アキキ	クモノイ	アク	之良之岐	ケリカミ	和名之	斗ノシ	カマツチ	カマツチ
カタ	アツキ	クモノス	クヌキ	クヌキ	オチ	スシ	斗ノコ	カマツチ	カマツチ
卷三	卷十三	卷廿六	卷廿三	卷十八	卷十七	卷十五	卷十二	卷十四	卷十五
腓	陸詞云腓	孫樞切韻云箒	箒	舉樹	羊蹄菜	羊蹄菜	羊蹄菜	羊蹄菜	羊蹄菜
脚腓也	陸詞云腓	皮也(二〇、二十一、ツ)	皮也(二〇、二十一、ツ)	本草云舉樹 <small>和名久理木</small> 日本	羊蹄菜也	唐韻云莖	唐韻云莖	唐韻云莖	唐韻云莖

144	145	146	147	148	149	150
腸	穀道	下部	緊脣	創	肝砲	遺尿
ハラワタ	シリ	シリ	アクナ	カサ	オモカサ	シユハリ
ハラ	シリヒス	シリノア	多ククシ	キス	名ミキ	シユハリ
卷三	卷七	卷七	卷五	卷七	卷三	卷十二
大腸	腹	兎缺	瘡	瘡	瘡	臨瀝
陸詞云看 <small>堅反和名加不</small> 、髒也 <small>髒字亦</small> 、 <small>(三、八、オ)</small>	野王案云腹 <small>腹反和名取良</small> 、所以容 <small>衰五藏之者也(三、八、ウ)</small>	續晉陽秋云魏泳之生而兎缺 <small>俗之以久知</small> 、辨色立成	唐韻云瘡 <small>音香和名加佐</small> 、瘵也 <small>瘵音香</small> 、瘵也 <small>瘵音香</small> 、 <small>(三、九、ウ)</small>	唐韻云瘡 <small>音香和名加佐</small> 、瘵也 <small>瘵音香</small> 、瘵也 <small>瘵音香</small> 、 <small>(三、二十四、ウ)</small>	唐韻云瘡 <small>音香和名加佐</small> 、瘵也 <small>瘵音香</small> 、瘵也 <small>瘵音香</small> 、 <small>(三、二十五、オ)</small>	病源論云臨瀝 <small>音摩反太天助取利小</small> 、便滴瀝也 <small>(三、二十三、ウ)</small>

151	152	153	154	155	156	157	158
遺尿	雙入	葦	言	兆	頭	瘵	瘵
シユハリ	アエルサネ	トモカラ	コトハ	シルシ	ハシ	ハシ	ハシ
名ユハリ	フタコ	タクヒ	イコロ	ハシメ	ホトリ	ハシ	ハシ
卷廿一	卷一	卷一	卷十	卷十五	卷廿一	卷二	卷廿
遺尿	雙入	葦	言	兆	頭	瘵	瘵
方言注云籬形小而高者							
江東呼爲籬 <small>呼擊反漢語抄云阿之賀</small> 、今案							
又用篔字見史記							
(十六、九、オ)							

以上が挙げられる。右の用例の中には、漢字のみ又は和訓のみ或は二者共に和名類聚抄に登載されているものもあるが、和訓と漢字との対応関係は、和名類聚抄において確認されない。

右に掲げたもののうち、101より142までが本草類に属するか又は本草類と関係する語であるが、これと本草和名とを比較すると、101・102の二項目については、墨筆訓・朱筆訓共に医心方本文の漢字との対応

が確認される。朱筆訓のみの対応が確認されるのは、103より117までの十五項目であり、これに準ずると考えられるのは118より122までの五項目である。逆に、墨筆訓と医心方本文の漢字との対応が確認されるのは、123・124・125の三項目のみである。126より142までは、本草和名において、和訓と医心方本文の漢字との対応関係は確認されない。

#### まとめ

以上、医心方に見える二系統の訓点の訓読法の異同のうち、実詞の訓について和名類聚抄・本草和名との比較を通して検討を加えてきたが、これにより以下のことが判明した。

- 一、医心方の本文の漢字と朱筆訓（丹波重基の訓点）との対応関係は、和名類聚抄における漢字と和語との対応関係に概ね重なるものである。但し、特に本草類に属する語については、医心方の本文の漢字と朱筆訓との対応関係は、和名類聚抄の和名の出典ともなつた本草和名の漢字と和語との対応関係にほぼ等しい。
- 一、医心方の本文の漢字と墨筆訓（藤原行盛の訓点）との対応関係は、和名類聚抄における漢字と和

語との対応関係とは重ならない部分を多く有する。

右のことは、朱筆訓（丹波重基の訓点）の持つ付訓の基盤と、墨筆訓（藤原行盛の訓点）の持つ付訓の基盤との異同に由来するものと考えられる。

朱筆訓の場合には、和名類聚抄に登載された「和名」を冠した語と一致する率が高い。この「和名」を冠した語は、典拠の明確な語であることは、既に先等の指摘されたところである。

一方、墨筆訓は、和名類聚抄に登載された「和名」を冠した語と一致する率が、朱筆訓の一致率よりは遙かに低く、「俗云」等注記のある新しい基盤に立つた付訓がある。又、第三節において少し触れた如く、和名類聚抄に見えない語でも、時代を下つた色葉字類抄・類聚名義抄において確認される漢字と和訓との対応関係に合うものをかなり見出すことができる。この事實は、墨筆訓の付訓の基盤が、朱筆訓の付訓の基盤に比較して新しいものであること、一つの傍証となり得るものであると考えられる。このような墨筆訓の付訓の情況は、既に指摘されて来た、藤原日野家が、佝家色の訓法・新しい訓法を有する家柄であつたこと（注）と軌を同じくするものと考えられ

る。

朱筆訓の付訓が統一であることは、32・35と68、47と48との間において疑問が残るが、44・45等の例からしても窺うことができる。又、今回取り上げた二系統の訓点の訓読法の異同として現われない部分について、朱筆訓の付訓の統一性は首肯できる所である。こうした付訓の出典に関して、例えば、本草類に属する語について、本草和名を想定することは、本草和名の抄出が、医心方にも諸葉和名として登載されていることや、先の比較からしても強ち不可能なことではないが、その他の語について特定の文献を出典として想定することは非常に困難であると考えられる。しかし、和名類聚抄をも含めた一つの等訓圖を想定してみると、朱筆訓はこの枠内に位置づけられるものと考えられる。一方、墨筆訓の場合には、これとは別の等訓圖を想定せざるを得ない。

へ注

注1 宮地敦子「身体語彙の変化」(かうべ)から「しらべ」(あたま)「なつきまなこ」(こ) (国語学第九十四集、昭和四十八年九月)

注2 永山勇「国語意識史の研究」第三章第四節 (昭和三十八年三月)

注3 大智度論II大坪併治「石山寺蔵大智度論加點経緯考」(国語国文第十一卷第一号、昭和十六年一月)六四頁に「足跟廣ク具足シテ満ち(89・1)」とある。

注4 大坪併治「出典願經四分律古点」(訓点語と訓点資料第九輯、昭和三十三年一月)

注5 築島裕「和名類聚抄の和訓について」(訓点語と訓点資料第二十五輯、昭和三十八年三月)

注6 小林芳規「要録漢籍訓読の国語史的研究」第五章 (昭和四十二年三月)

「付記」小稿を成すに当り、宮内庁書陵部御当局の方々の御厚情を賜った。又、小林芳規先生、佐々木峻氏をはじめとする各位より御指導、御助言を忝うした。記して深謝申し上げる。